

神奈川県における国府系ナイフ形石器の様相

旧石器時代研究プロジェクトチーム

はじめに

当プロジェクトでは、これまで「石器群の諸問題」、「遺跡間接合」、「遺構」をテーマとして資料集成・検討を行い、成果を示した。昨年度で2007年から継続していた「遺物分布」のテーマが一区切りとなつたため新たなテーマを設定した。今年度のテーマ設定の契機は、瀬戸内技法を研究されている絹川一徳氏（公益財団法人大阪市博物館協会）が当財団に出向されたことに起因する。

国府型ナイフ形石器は、「瀬戸内技法」と呼ばれる盤状石核の幅いっぱいに規格的な横長剥片（翼状剥片）を剥離する技術によって製作されたナイフ形石器である。この瀬戸内技法とナイフ形石器製作が強く結びついた資料を「国府石器群」と呼ぶ。これらとは別に技術・型式的な系統関係を持つ資料群を「国府系石器群」と呼ぶ。神奈川県内では、国府型ナイフ形石器は出土するものの、瀬戸内技法との結びつきは判っておらず、資料群としては、「国府系」に属する。よって、表題は「国府型」ではなく「国府系」を用いた。 (脇)

1. かながわにおける国府系ナイフ形石器の発見

国府系ナイフ形石器の東日本への波及については、1968・69年に山形県越中山K遺跡（加藤 1975、加藤・鈴木 1976）と新潟県御淵上遺跡（中村 1971）で国府型ナイフ形石器が発見され、東北地方の日本海側に波及していたことが明らかとなった。一方、関東地方では、1970年に発掘調査が行われた東京都野川遺跡の第IV4文化層で「Backed blade のなかには瀬戸内地方の国府型に似て背部加工が厚く、一邊のみ刃潰しを施す類が特徴的に存在する。」と報告され（小林・小田他 1971）、国府型ナイフ形石器そのものは存在しないものの、野川IV4文化層の時期が国府型ナイフ形石器の時期に相当すると認識された（白石 1976他）。そして、1977年には埼玉県殿山遺跡から関東地方で最初の国府系ナイフ形石器が確認され（松井 1980）、その後の調査で、国府系ナイフ形石器とともにその素材の剥片剥離技術を示す石器群が発見された。

相模野台地では、1968年の大和市月見野遺跡群の発掘調査以降旧石器時代遺跡の調査が多数行われてきたが、1981・82年に、相模原市橋本遺跡第IV文化層・同第V文化層（金山・土井・武藤 1984）と海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡第IX文化層（中村・諏訪間・堤他 1983、堤・諏訪間他 1997）から相次いで国府系ナイフ形石器が発見された。このうち柏ヶ谷長ヲサ遺跡の国府系ナイフ形石器は、1982年11月に開催された神奈川考古同人会主催の第2回目のシンポジウムにおいて、B 2層各文化層の豊富な石器群とともにいち早く資料化され、埼玉県殿山遺跡の資料とともに、石材や剥片剥離技術を含め瀬戸内技法との関係や国府型ナイフ形石器の系統などが議論された（神奈川考古同人会編 1982・1983）。その後、1987・90年には綾瀬市上土棚遺跡で複数の国府系ナイフ形石器とその素材剥片を作出した石核などが発見され（矢島 1996）、1990年代以降になると、綾瀬市吉岡遺跡群C区（白石 1997）、海老名市大松原東遺跡（織笠 1998）、平塚市原口遺跡（畠中他 2002）、藤沢市用田南原遺跡（栗原 2004）からそれぞれ国府系ナイフ形石器が発見された。

(鈴木)

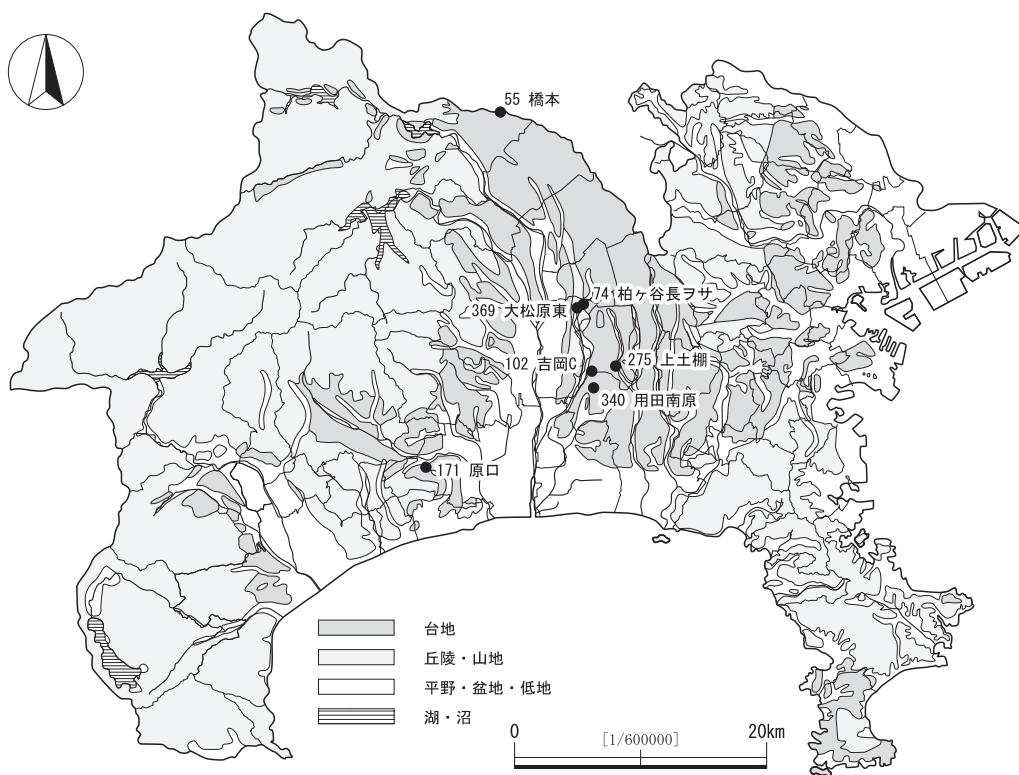
2. かながわの「国府系ナイフ形石器」資料

かながわで出土した「国府系ナイフ形石器」と推察されている資料を抽出した。抽出の基準は「石核の底面が識別される横長剥片を素材とするナイフ形石器」である。

結果、7遺跡（11文化層）から当該石器21点を抽出した。遺跡の位置は第1図に示し、当該石器が出土した遺物集中の詳細を第1表に記した。また各石器について第2図に示し、計測値等を第2表に記した。

当該石器の出土傾向として、ブロック内からの出土でも、単独で出土するものが大半である。ただし上土棚遺跡ではナイフ形石器や関連資料と考えられる石核が複数点出土しているが、それらの分布状況などの詳細は不明である。

（畠中・三瓶・大塚）



第1図 国府系ナイフ形石器出土遺跡

第1表 国府系ナイフ形石器出土石器集中の遺物分布

No.	遺跡名	報告書 掲載番号	出土 層位	文化 層	各 集中 No.	分布 範囲 (m)	石器 点数	分布 密度	分布 状態	器種組成	石材組成	備考
55	橋本	第122図 4-23・190	B2U	IV	-	-	173	-	散漫	ナ9、スク10、礫5、F127、Ch11、核11	黒156、珪7、粘3、硬砂2、玄1、その他4	礫群13 炭化物集中2
55	橋本	第125図 4-12・809	B2L～ L3	V	-	-	-	-	-	ナ、搔・削、礫器、核	黒、珪、玄、硬砂、礫岩	炭化物集中6
74	柏ヶ谷 長ヲサ	第196図 241	B2LM	IX	9	径8.0	181	3.60	散漫	ナ7、角1、削1、搔1、RF1、UF6、敲1、磨2、F146、Ch3、核10	黒92、ガ黒安40、硬細凝45、珪質2、不明2	礫群71～ 76 配石27・ 28
74	柏ヶ谷 長ヲサ	第212図 344	B2LM	IX	12	16.0 ×8.0	179	1.40	散漫	ナ8、削3、RF1、UF1、敲1、F155、Ch1、核9	黒35、ガ黒安96、木14、硬細凝33、中凝1	礫群58～ 65 配石24・ 25
74	柏ヶ谷 長ヲサ	第229図 437	B2LM	IX	18	径8.0	75	1.49	散漫	ナ1、削2、搔1、RF1、UF1、磨9、F57、Ch1、核2	黒21、ガ黒安14、木2、チ1、硬細凝27、珪質岩1、不明9	礫群101 配石37～ 41

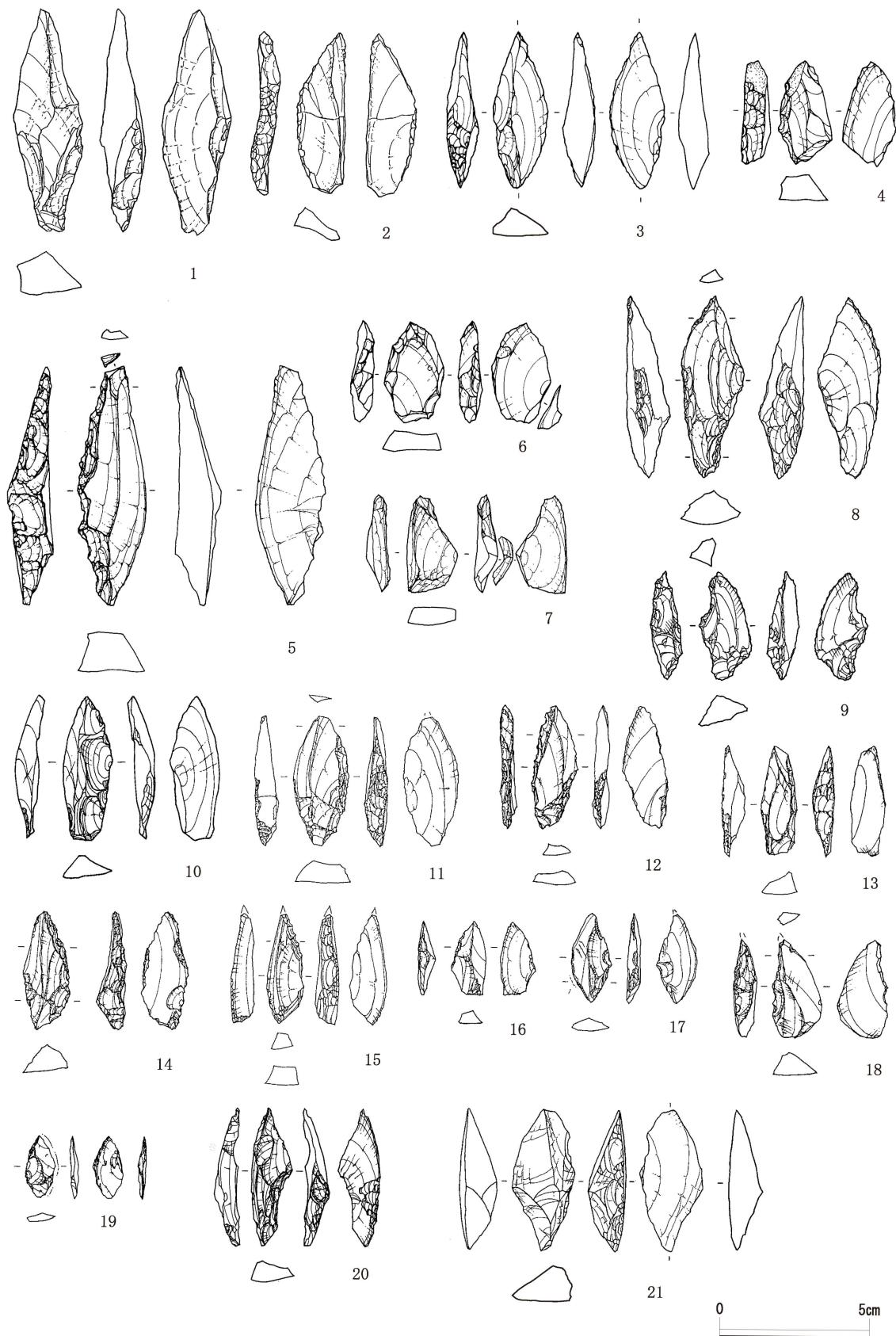
神奈川県における国府系ナイフ形石器の様相

No.	遺跡名	報告書 掲載番号	出土 層位	文化 層	各 集中 No.	分布 範囲 (m)	石器 点数	分布 密度	分布 状態	器種組成	石材組成	備考
74	柏ヶ谷 長ヲサ	第253図1	B2LL	X	1	17.0 × 11.0	84	0.45	散漫	ナ2、角1、削1、搔2、 RF2、F64、Ch3、核3	黒、ガ黒安、硬細凝、 中凝	礫群12～ 17 配石10
74	柏ヶ谷 長ヲサ	第287図10	B3LL	X II	2	径8.0	30	0.59	散漫	ナ4、削1、RF1、敲2、 F17、Ch4、核1	黒15、ガ黒安10、硬細 凝5	礫群3～6 配石3
102	吉岡C区	第161図1	B2	-	27	11.0 ×8.5	166	1.78	-	ナ3、切11、角2、削3、 搔4、錐2、RF4、UF1、 F45、Ch54、核8、叩1、 磨28	ガ黒安4、赤11、黒105、 硬細凝16、中凝1、安29	
171	原口	第310図2 第312図21	B2	II	1	4.0× 2.6	66	6.30	やや 散漫	ナ1、角1、搔1、RF1、 核1、F類61	黒43、ガ黒安15、硬細 凝8、	
275	上土棚	第139図43	B2LU	IV	-	-	-	-	-	ナ、削、錐	黒、珪、凝	
275	上土棚	第142図 57～60 第145図82 第146図 87・89	B2LU	III ・ IV	- 30超	-	-	-	濃密	角、ナ、搔、削、核、 F	凝、黒、珪	
275	上土棚	第153図 114	B2LM	V	-	-	-	-	-	ナ、磨	黒、安	
340	用田南原	第232図6	B2U～ B2L1	VI	1	8.1 × 4.2	649	19.07	密集	角4、ナ6、削6、搔1、 F188、Ch86、核3、敲1、 磨1、礫349	黒278、砂4121、中凝 112、硬細凝32、赤20、 流20、細凝19、閃11、 粗凝9、角閃7、細安6、 チ4、細凝(玄)2、ガ 黒安3、斑1、安1、細斑 1、不明2	礫群1基
369	大松原東	第141図1	B2M	II	-	-	38	-	-	ナ1、スク2、彫1、UF 切断F4、切断F17、 両極F3、F7、Ch1、核1、 両極核1	黒26、ガ黒安6、硬細凝 6	断面抜き 取り

第2表 神奈川県内遺跡出土の国府系ナイフ形石器属性一覧

掲載 番号	No.	遺跡名	器種	石材	法量 [° · cm · g 残存 ()]					報告書 掲載番号	文献名
					底角	長さ	幅	厚さ	重量		
1	55	橋本IV	ナイフ形石器	硬質細粒凝灰岩	54	7.4	2.3	1.5	17.3	第122図 4-23・190	橋本遺跡調査団 編 1984
2	55	橋本V	ナイフ形石器	珪石	55	5.4	1.5	1.1	6.4	第125図 4-12・809	
3	74	柏ヶ谷長ヲサIX	ナイフ形石器	硬質細粒凝灰岩	40	5.3	1.9	1.1	6.7	第196図241	
4	74	柏ヶ谷長ヲサIX	ナイフ形石器	ガラス質黒色安山岩	51	3.7	1.9	1.1	6.7	第212図344	
5	74	柏ヶ谷長ヲサIX	ナイフ形石器	硬質細粒凝灰岩	58	(8.0)	2.3	1.6	23.4	第229図437	
6	74	柏ヶ谷長ヲサX	ナイフ形石器	ガラス質黒色安山岩	78	3.3	2.0	0.7	5.2	第253図1	
7	74	柏ヶ谷長ヲサXII	ナイフ形石器	ガラス質黒色安山岩	64	3.1	1.6	0.7	3.5	第287図10	
8	171	原口II	ナイフ形石器	硬質細粒凝灰岩	43	6.1	2.2	1.6	14.1	第310図2	中村・諏訪間・ 堤他 1997
9	171	原口II	ナイフ形石器	柏崎系黒曜石	50	3.6	1.8	1.0	4.4	第312図21	
10	102	吉岡C区B2	ナイフ形石器	中粒凝灰岩	42	4.6	1.5	1.6	4.7	第161図1	
11	275	上土棚IV	ナイフ形石器	硬質細粒凝灰岩	56	(4.3)	1.8	0.8	-	第139図43	
12	275	上土棚III・IV	ナイフ形石器	硬質細粒凝灰岩	47	4.2	1.6	0.6	-	第142図57	
13	275	上土棚III・IV	ナイフ形石器	硬質細粒凝灰岩	56	3.6	1.2	0.7	-	第142図58	
14	275	上土棚III・IV	ナイフ形石器	硬質細粒凝灰岩	46	4.0	1.6	1.0	-	第142図59	
15	275	上土棚III・IV	ナイフ形石器	安山岩	70	(3.6)	1.1	0.8	-	第142図60	
16	275	上土棚III・IV	ナイフ形石器	珪岩	44	2.4	1.2	0.6	-	第145図82	
17	275	上土棚III・IV	ナイフ形石器	硬質細粒凝灰岩	31	(2.9)	1.4	0.5	-	第146図87	
18	275	上土棚III・IV	ナイフ形石器	硬質細粒凝灰岩	46	(3.3)	1.7	0.8	-	第146図89	
19	275	上土棚III・IV	ナイフ形石器	黒曜石	27	2.1	1.1	0.3	-	第153図114	
20	340	用田南原VI	ナイフ形石器	柏崎系黒曜石	60	4.6	1.4	0.8	3.1	第232図6	栗原他 2004
21	369	大松原東II	ナイフ形石器	ガラス質黒色安山岩	40	4.8	2.2	1.2	-	第141図1	海老名市編 1998

※本表は井関2009の第1・2表を改変し、新たな資料を追加した。なお表中では石核底面と主要剥離面で構成される刃部角を「底角」と省略。
※1の石材名は、報文中黒曜石であるが、本表作成時に相模原市教育委員会へ確認し硬質細粒凝灰岩に変更して記載している。



第2図 神奈川県内の国府系ナイフ形石器 [1/2] (報告書掲載図を一部改変)

3. かながわの国府系ナイフ形石器の形態と型式

国府系ナイフ形石器は形態を型式に、型式を系統に優先しないで論じることとする。というのは国府系ナイフ形石器については、系統觀が前提であり、形態の認識自体が研究史的にあるいは研究者間で定まっているとは考え難い等の理由からである。従ってここではかながわの国府系ナイフ形石器から国府型ナイフ形石器、国府型ナイフ形石器からその形態という脈絡で論ずることとする。

日本列島における旧石器時代のナイフ形石器文化の示準石器とされるナイフ形石器は素材用剥片の鋭い縁辺を一部に残し、それ以外の器体に一連の刃潰しによる二次加工を施した石器で、縦長剥片の基部（打面部）側を加工する杉久保系、縦長剥片の両側縁を加工する茂呂系、横長剥片の基部側を加工する国府系等、石器作りの方法に技術系統の差があり、このうちの国府系ナイフ形石器は日本列島外には出現地を求めていくことから、その出現経緯には日本列島独自の個性をもつ旧石器時代文化形成の一つの要因があると指摘されている。

国府系ナイフ形石器は、始良Tn (AT) 火山灰降灰以降の西日本における近畿（西部）・瀬戸内（中央部）地方を主要な分布域（特に瀬戸内海東部地域の分布が濃密）とするが、大阪府藤井寺市国府遺跡を示準遺跡として型式設定された国府型ナイフ形石器は「瀬戸内技法」と呼ばれる一連の盤状（剥片）石核（第一工程）～翼状（横長）剥片（第二工程）を経過し、その後仕上げられる（第三工程）。主要な分布域の瀬戸内技法で作られた国府型ナイフ形石器を示準とする石器群は国府石器群とされ、主要な分布域以外の瀬戸内技法のバリエーションかそれ以外の技法で作られた国府系ナイフ形石器を示準とする石器群は「国府系石器群」と一般的には区別される傾向にある。

かながわは国府系ナイフ形石器における主要な分布域の外に位置することによりそこで見出される瀬戸内技法で作られるかもしくはそうであったと推定される国府型ナイフ形石器も国府系ナイフ形石器と呼称されることが型式的な意味においては妥当であると言えよう。しかしこの妥当性はサヌカイト製の国府系ナイフ形石器がかながわでは未発見という事情にもよう。現時点でも近畿・瀬戸内地方を中心とした場合、そこから島状に外れる南関東地方に位置するかながわの国府系ナイフ形石器は石器作りにおいて、直接的ではなく派生的な技術的影響を受けた可能性を抜きに型式性は論じられない。このことが日本列島全体の数量比較におけるかながわのあり方の一端を指摘できよう。また、かながわの国府系ナイフ形石器は南関東だけに限った数量比較においても型式的に中心的な存在ではないこともすでに知られている。今日、かながわの国府系ナイフ形石器は相模野Ⅲ期（段階V）を中心に編年的な存在が確認されている。

以上、かながわの国府系ナイフ形石器における系統性と型式性についてその概念を論じた。以下はその形態性について論じる。国府系ナイフ形石器の形態を一言で説明すると石核の底面が識別される横長剥片を素材とするナイフ形石器となるが、更にシンプルに言い換えれば「有底横長剥片」素材（絹川 2011）のナイフ形石器となろう。とはいえてそこには技法と一体となった型式性や他の系統のナイフ形石器との差異から抽出される系統性において見出される特徴はない。しかしながら現時点のかながわでは「瀬戸内技法」の接合資料が存在しない以上、元の素材用剥片全体の形状や石器作りの技法まで含めて国府系ナイフ形石器の形態を論じることは困難である。

(井関)

4. かながわからみた瀬戸内技法の起源について

「瀬戸内技法における「盤状剥片」が翼状剥片剥離工程内において、最も重要な位置にある」（砂田 1986 23頁）とし、南関東における盤状剥片石核の抽出とその系譜を論じたことがある。その時点での相模野におけるX層～VII層段階ではB B 3層主体の橋本遺跡出土資料に限られた（砂田前掲書）。今回、その後報告された相模野と周辺地域の事例を垣間見るとともに、現状と展望を試みたい。

瀬戸内技法生起の地とされる近畿・中四国における国府石器群は「南関東のIX層上部～VII層期に相当する」時期がその萌芽であり、「瀬戸内技法の原形となる横長剥片を素材とした一側縁加工の小型のナイフ形石器」の出現（三好 2014 96頁）にとどまる。「サヌカイト」・「有底横長剥片」・「一側縁加工ナイフ形石器」という瀬戸内技法「骨太の原則」（絹川 2011 70頁）の三拍子が揃うのは、その後V層段階を待つこととなる。かつて、南関東X層からの盤状剥片石核を抽出したが（砂田前掲書）、「石器群の主体的な技術基盤となることや特定の石器の製作と結びつくことはなかった」（麻柄 2011 6頁）と論評されている。

その後蓄積されたX層段階の資料に目を向けると、熊本県石の本遺跡群出土の安山岩製台形様石器・二次加工剥片・盤状剥片素材の石核（池田 1999 26・49・107頁）、同県沈目遺跡出土の輝緑凝灰岩製の鋸歯状の削器・抉入石器（木崎 2002 23・26・29頁）にその痕跡を観ることができる。下総では、千葉県草刈遺跡C地区第1文化層「X層下部とXI層の境界」（島立編 2004 11頁）から径3mの範囲から28点の小形の寸詰まりあるいは横長剥片が出土している。中でも使用痕を有する剥片とされた珪質頁岩製の横長剥片は有底横長剥片に共通する。また、VII層～IX層上部の第4文化層C17-Aブロック出土流紋岩製の母岩⑩個体4は大形盤状剥片裏面を剥片剥離作業面として横長寸詰まり剥片を剥離している（島立編前掲書157頁）。同県墨古沢南I遺跡第1文化層IXc層上部第10ブロック出土のガラス質黒色安山岩製の二次加工のある剥片（新田 2005 81頁）、IXc層上部～IXa層下部第22ブロック出土のガラス質黒色安山岩製の石核（同124頁）、IXa層下部第40ブロック出土のガラス質黒色安山岩製の石核（同211頁）、IXa層下部第41ブロック出土のガラス質黒色安山岩製の楔形石器、さらに有底横長剥片素材の台形様石器（同214頁）などは瀬戸内技法による国府型ナイフ形石器を彷彿とさせる。武藏野では東京都野水遺跡第1地点VII層下部の第3文化層出土の黒曜石製有底横長剥片素材の加工痕を有する剥片・石核（調布市遺跡調査会編2006 84・88頁）が出土している。

相模野では神奈川県吉岡遺跡群A区BB4層上部のガラス質黒色安山岩製の有底横長剥片を素材とするナイフ形石器（砂田 1996 55頁）、B区BB4層上部のガラス質黒色安山岩製の残核（同105頁）、相模川以西では同県津久井城跡馬込地区BB4層第6文化層の母岩HFT03、HFT04、HFT07-3・327、HFT3914、SSH02-2・3の接合資料（畠中編 2010 414-415頁 図版150-155・169・193・212）に剥片素材の石核から横長剥片を剥離している。HFT04の剥片打面直下の状態から母岩の硬さと同程度、硬い、柔らかい、ハンマー素材の違いを類推させる。

「骨太の原則」に則る瀬戸内技法の発生前の管見による列島内X層段階周辺以降の横長剥片剥離工程内に、瀬戸内技法あるいは国府系石器群の剥片剥離工程の指針を既に包含していたこととなろう。サヌカイト類似の火成岩系石材の層理とその特質を反映した石器製作工程全般の中で、他の堆積岩系石材にも横長剥片剥離工程の種類の拡大すら見せている。

瀬戸内技法の拡散要因とその方法は「直接的移動・移住」「情報の受容」（森先 2011 76頁）といった物質文化伝播の基本的思考法が援用されよう。ただし、相似相同という比較検討を目的とする石器形態の感覚的類似性でなく、属性分析に基づく比較検討が必須である。すなわち石器製作工程内の過程にあって分析対象とする石器の客観的属性の抽出が肝要であり、今後のさらなる資料体の抽出と分析を試みたい。（砂田）

5. 濑戸内技法からみたかながわの国府系ナイフ形石器

(1) 国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法

国府型ナイフ形石器は翼状剥片を素材とする柳葉形を呈した中・大形のナイフ形石器である。翼状剥片の打面側を腹面側から整形剥離を行い、一側縁加工に仕上げたものが典型的であるが、刃縁側の基部にも整形剥離を施した二側縁加工のものも認められる。この石器の特徴は、素材である翼状剥片が瀬戸内技法によつて生産されることである。瀬戸内技法とは、「翼状剥片石核の素材となる大形剥片の獲得（第1工程）にはじまり、それらを石核に転じて規格的な翼状剥片を量産し（第2工程）、最後に翼状剥片に整形剥離を施して国府型ナイフ形石器に仕上げる（第3工程）一連の工程」（松藤 2007）がシステムティックに行われたもので、ナイフ形石器の集中的な製作が行われた。盤状剥片を素材とした石核からその幅一杯に剥離して平坦な石核底面を取り込み、山形の打面縁の頂部を打点として直線的に後退させることで翼状剥片が規格的・連続的に剥離される。これにより小形ではない中・大形の国府型ナイフ形石器が「量産」されるのである。

一方、「量産」という前提がないなら、翼状剥片と同形の有底横長剥片は瀬戸内技法以外の横剥ぎ技術でも生産が可能である。実際、近畿・瀬戸内地方において、瀬戸内技法以外の横剥ぎ技術によって製作された国府型と同一あるいは類似のナイフ形石器は普遍的に存在する。こうした事情が、サヌカイト石器文化圏である近畿・瀬戸内地方以外の地域で出土した国府型ナイフ形石器の認定とそれを伴う石器群に対する評価を複雑にしてきた。

「国府石器群」（松藤 1985）は、瀬戸内技法を技術基盤とし、国府型ナイフ形石器、翼状剥片、翼状剥片石核などの各工程を示す石器遺物で組成される。古日本列島における瀬戸内技法の分布は近畿・瀬戸内地方を越えて、東日本では岐阜県日野遺跡、新潟県御淵上遺跡、群馬県上白井西伊熊遺跡、山形県越中山遺跡K地点など広範な地域に及ぶ。これらの遺跡では国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法の各工程資料が主体的で国府石器群の要件を十分に満たすものである。

ただし、現在のところ東日本で瀬戸内技法の直接的な波及を示す石器群は、北陸から東北地方の日本海沿岸地域と北関東に限られている。南関東では、立川ロームV層上部～IV層下部の段階において横剥ぎ技術とともに角錐状石器や国府型あるいはそれに類似する有底横長剥片素材のナイフ形石器が認められるものの、瀬戸内技法そのもの存在はきわめて希薄である。

(2) 近畿・瀬戸内地方の横剥ぎ石器群と瀬戸内技法の成立

近畿地方では、兵庫県板井寺ヶ谷遺跡下位文化層（山口編 1991）や七日市遺跡第IV文化層（山本編 2004）のサヌカイト製石器群の存在から、AT降灰以前に横剥ぎのナイフ形石器が出現したことは明らかである。この段階では瀬戸内技法は認められないが、「サヌカイト」・「有底横長剥片」・「一側縁加工」という石器群を特徴づける3つの基本的な要件（骨太の原則）が成立する（絹川 2011）。

AT降灰後、九州地方で剥片尖頭器や角錐状石器が出現したように、石器組成に大形の尖頭器が組み合わされるようになると、近畿・瀬戸内地方では、大形で反りが生じにくい有底横長剥片素材のサヌカイト製ナイフ形石器がその機能を代替した。つまり、瀬戸内技法の成立過程とは、ナイフ形石器の大形化を平坦な石核底面を取り込みながら石核幅一杯に翼状剥片を剥離することで対処した結果なのであり、適切な大きさの原石が調達可能な原産地遺跡などで集中的に量産することで、第1～3工程の一貫性・連続性を技法として顕在化させたのである。さらに、翼状剥片や完成したナイフ形石器を他所へ持ち出す「異所展開」（山口

1991) によって、遺跡間における石器組成の均衡が図られた。

近畿・瀬戸内地方において、AT降灰以降で瀬戸内技法の出現後に認められる横剥ぎ石器群には次の三つのグループがある。①国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法が主体の石器群、②国府型とともに多様な形態のナイフ形石器が有底横長剥片、縦長・短形剥片などの技術複合によって製作される石器群、③有底横長剥片を素材とする小形ナイフ形石器が横剥ぎを主体とする技術複合によって製作される石器群である。①は前述の「国府石器群」、③については大阪府長原遺跡89-37次（趙編 1996）や八尾南第6地点（山田編 1993）などの事例があり、瀬戸内技法の出現以前でAT降灰層準の石器群とみなす見解がある（森先 2010）。②の石器群は、横剥ぎ技術による有底横長剥片や石刃・石刃状剥片、短形剥片を素材とした一側縁・二側縁・切出形などの多様な形態のナイフ形石器が国府型ナイフ形石器に共存する。事例として長原遺跡97-12次の出土資料が知られる（絹川編 2000）。国府型ナイフ形石器は瀬戸内技法により製作されたものが含まれるが、それ以外の手法でも大形の国府型ナイフ形石器が製作されている（絹川編前掲 図129～131）。素材となった有底横長剥片（翼状剥片）は横剥ぎ石核の初期剥離の段階で得られたもので、その後に石核は横剥ぎから石刃剥離に転換しており、残核は石刃核である。こうした有底横長剥片と石刃、さらに短形剥片の剥離が混在した接合資料が複数認められる（絹川編前掲 図122・123）。つまり、瀬戸内技法による連続的な集中製作によらず、見合った石材が確保され、石核の大きさなどの条件が満たされた機会で単発的な翼状剥片剥離によって大形の国府型ナイフ形石器が製作されているのである。こうした国府型類似のナイフ形石器が瀬戸内技法以外の横剥ぎ技術によって製作された②のような石器群は、使用石材や技術要素の組み合わせに違いがあるものの、岡山県恩原遺跡S文化層（稻田編 1996・2009）や島根県原田遺跡第5層石器群（伊藤編 2008）など中国山地や四国地方を含む西日本の広い範囲で認められる。これらの地域では瀬戸内技法が伴わない場合が多いが、近畿・瀬戸内地方では②の石器群の大半で瀬戸内技法が伴う。

AT降灰以前に成立した横剥ぎナイフ形石器の「骨太の原則」は、後期旧石器時代後半期へ至る段階において②の石器群のように多様な形態のナイフ形石器と横剥ぎを中心とした技術複合の中から中・大形の横剥ぎナイフ形石器を生産するようになり、さらに中・大形のナイフ形石器が独立的かつ集中製作される過程で異所展開による①の瀬戸内技法を主体とする石器群を並行させた。その後、③のように有底横長剥片素材の小形ナイフ形石器を生産する横剥ぎ技術主体の石器群へ収斂させていく過程をたどったものと思われる。

(3) かながわにおける国府系ナイフ形石器

以上のような観点から、既往の調査において神奈川県下から出土した有底横長剥片素材のナイフ形石器について概観しておきたい。

南関東では、かねてより立川ロームV層上部～IV層下部の層準において厚手の横長剥片を素材とする鋸歯縁加工のナイフ形石器や角錐状石器を含む横剥ぎ技術による石器群の存在が知られており、埼玉県殿山遺跡や神奈川県柏ヶ谷長ヲサ遺跡などで国府型ナイフ形石器が出土したことから、近畿・瀬戸内地方の当該石器群との関係が指摘されていた。この段階は、横長・短形剥片素材の切出形ナイフ形石器や石刃素材の基部加工のナイフ形石器など、多様な形態のナイフ形石器に角錐状石器や円形搔器が伴う。こうした様相は、前述した②の石器群のあり方に共通する。

典型的な国府型ナイフ形石器が出土した柏ヶ谷長ヲサ遺跡第IX文化層例では、このナイフ形石器に瀬戸内技法関連資料が伴わない。しかし、硬質細粒凝灰岩やガラス質黒色安山岩を用いて石核底面を取り込んだ横

長剥片を素材とし鋸歯状の整形加工を施したナイフ形石器が複数認められ、同じ石材の剥片素材の横剥ぎ石核も出土している。上土棚遺跡第IV文化層でも硬質細粒凝灰岩製の国府型と有底横長素材のナイフ形石器が認められ、やはり剥片素材の横剥ぎ石核が出土している。いずれも瀬戸内技法のような明確な有底横長剥片の剥離技術の存在は指摘できないものの、これらのナイフ形石器は石核の形状や消耗の度合いより単発的な翼状剥片剥離を介在させるような手法で製作された可能性がある。石核消費により可変的な横剥ぎ技術が効率的に用いられることで、有底横長剥片を含めた多様な横剥ぎ石器群の素材が供給されたものとみられる。

(絹川)

6. おわりに

今回は、本プロジェクトに近畿地方で瀬戸内技法研究を行っている絹川一徳氏を迎え、「神奈川県における国府系ナイフ形石器の様相」と題して、本県内出土の国府系ナイフ形石器に焦点を当てた報告を行った。

国府石器群は、瀬戸内技法との強い関連性の上に成立し、近畿・瀬戸内地方を中心展開されていることは周知の事実である。現在のところ、これ以外の地域への広がりは、北陸から東北地方の日本海沿岸地域と北関東に限られる。とりわけ、群馬県上白井西伊熊遺跡では、黒色安山岩などを用いた瀬戸内技法関連資料が多数出土しており、上記前提の強い結びつきが認められる。しかし、これらの素要は、砂田が指摘するように、既にAT降灰以前から各地で萌芽がみられる。その上で近畿・瀬戸内地方では「骨太の原則」が成立し、後期旧石器時代後半期に国府型ナイフ形石器が登場してくると絹川は指摘する。同時に国府石器群の成立は石材原産地と結びつくが、これに併行する存在として石材原産地以外の地域における非瀬戸内技法の横剥ぎ技術による国府型ナイフ形石器および国府系ナイフ形石器がある。今回はその共伴資料の技術基盤を整理し、本県出土資料が後者の複数の技術基盤をもつた石器群と関連して位置付けられる可能性を示唆した。

現在、本県内の「国府系ナイフ形石器」の出土例は7遺跡に留まるが、その存在は明らかである。今後も、時には今回の様に他地域の研究者の方の視点を踏まえ、本石器群の様相を探っていく必要があろう。

(栗原)

参考引用文献

- 池田朋生 1999『石の本遺跡群II 第54回国民体育大会秋季主会場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』熊本県文化財調査報告178集 熊本県教育委員会
井関文明 2009『東日本の国府系ナイフ形石器(2)』『神奈川考古』第45号
伊藤 徳広編 2008『原田遺跡』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12 島根県教育委員会
稻田孝司編 1996『恩原2遺跡』、岡山大学文学部考古学研究室
稻田孝司編 2009『恩原1遺跡』、恩原遺跡発掘調査団
岩宿博物館編 2006『第42回企画展「岩宿時代はどこまで遡れるか」展示図録』
岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会 2011『上白井西伊熊遺跡と東日本の瀬戸内技法』予稿集
海老名市編 1998『海老名市史1』資料編 原始・古代 海老名市
織笠 昭 1998『先土器時代 大松原東遺跡』『海老名市史』1 資料編 原始・古代
加藤 稔 1975『越中山K遺跡』『日本の旧石器文化』2
加藤 稔・鈴木和夫 1976『越中山K遺跡の接合資料』『考古学研究』22-4
神奈川考古同人会編 1983『シンポジウム 南関東を中心としたナイフ形石器文化の諸問題』『神奈川考古』16
金山喜昭・土井永好・武藤康弘 1984『橋本遺跡—先土器時代編—』相模原市橋本遺跡調査会
木崎康弘 2002『旧石器時代の遺物』城南町文化財調査報告第12集沈目遺跡
絹川一徳編 2000『長原遺跡東部地区発掘調査報告III』(財)大阪市文化財協会
絹川一徳 2011『西日本における瀬戸内技法の展開』岩宿フォーラム2011／シンポジウム『上白井西伊熊遺跡と東日本

- の瀬戸内技法』予稿集 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会
栗原伸好他 2004『用田南原遺跡』かながわ考古学財団調査報告168 財団法人かながわ考古学財団
小林達雄・小田静夫他 1971「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』10-4
島田和高 2012『2012年度明治大学博物館特別展 氷河時代のヒト・環境・文化—THE ICE AGE WORLD—』
島立桂編 2004『千原台ニュータウンX—市原市草刈遺跡（東部地区旧石器時代）—』千葉県文化財センター調査報告
第462集 財団法人千葉県文化財センター
白石浩之他 1997『吉岡遺跡群IV』かながわ考古学財団調査報告21 財団法人かながわ考古学財団
砂田佳弘 1986「盤状剥片石核の系譜—南関東先土器時代石器群における剥片剥離工程の一様相一」『神奈川考古』第22号 神奈川考古同人会10周年記念論集 神奈川考古同人会
砂田佳弘 1996「遺構と遺物・まとめ」『吉岡遺跡群 I』かながわ考古学財団調査報告6 財団法人かながわ考古学財団
調布市遺跡調査会編 2006『都立武蔵の森公園埋蔵文化財調査—野水遺跡第1地点—報告書』調布市遺跡調査会
趙哲濟編 1996『長原・瓜破遺跡発掘調査報告IX』（財）大阪市文化財協会
中村喜代重・諏訪間順・堤隆他 1983『先土器時代海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡発掘調査概要報告書』柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団
中村孝三郎 1971『御淵上遺跡』長岡市立科学博物館研究調査報告10
新田浩三 2005『東関東自動車道水戸線酒々井PA埋蔵文化財調査報告書1—酒々井町墨古沢南 I 遺跡—旧石器時代編』千葉県文化財センター調査報告第504集 財団法人千葉県文化財センター
橋本遺跡調査団編 1984『橋本遺跡VI 先土器時代編』相模原市橋本遺跡調査会
畠中俊明他 2002『原口遺跡IV 旧石器時代』かながわ考古学財団調査報告135 財団法人かながわ考古学財団
畠中俊明編 2010『津久井城跡馬込地区』かながわ考古学財団調査報告249 財団法人かながわ考古学財団
藤田健一 2011『南関東地方の横長剥片製ナイフ形石器』岩宿フォーラム2011／シンポジウム『上白井西伊熊遺跡と東日本の瀬戸内技法』予稿集 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会
麻柄一志 2011『瀬戸内技法と日本列島の石器文化』岩宿フォーラム2011／シンポジウム『上白井西伊熊遺跡と東日本の瀬戸内技法』予稿集 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会
松井政信 1980「埼玉県上尾市殿山遺跡出土の先土器時代資料」『石器研究』1
松藤和人 1985「瀬戸内技法・国府石器群研究の現状と課題」『旧石器考古学』30 旧石器文化談話会
松藤和人 2007「瀬戸内技法」『旧石器考古学辞典<三訂版>』旧石器文化談話会編 学生社
三好元樹 2014「近畿・中四国における旧石器時代の年代と編年」『旧石器研究』10 日本国旧石器学会
森先一貴 2010『旧石器社会の構造的変化と地域適応』六一書房
森先一貴 2011a「国府系石器群の多様性」『旧石器考古学』74
森先一貴 2011b「古本州島の地域文化と国府系石器群」岩宿フォーラム2011／シンポジウム『上白井西伊熊遺跡と東日本の瀬戸内技法』予稿集 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会
矢島國雄 1996「先土器時代」『綾瀬市史』9 別編 考古
山口卓也 1991「近畿地方における旧石器時代遺跡の立地—遺跡立地の差と地域性の発生について—」『関西大学考古学資料室紀要』第8号 関西大学文学部考古学資料室
山口卓也編 1991『板井寺ヶ谷遺跡—旧石器時代の調査—』兵庫県文化財調査報告書第96-1冊 兵庫県教育委員会
山田隆一編 1993『八尾南遺跡III—旧石器出土第6地点—』大阪府文化財調査報告書第44輯 大阪府教育委員会
山本誠編 2004『七日市遺跡III 旧石器時代の調査』兵庫県文化財調査報告第272冊 兵庫県教育委員会